

Netra SPARC T3-1B サーバーモジュール 設置マニュアル



Part No. E25680-02
2011 年 9 月

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリパース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD, Opteron, AMD ロゴ, AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。



リサイクル
してください



Adobe PostScript

目次

このマニュアルの用法 v

設置の計画 1

出荷キットの内容一覧 2

機能 3

仕様 4

物理仕様 4

電気仕様 5

設置計画 5

プリインストールされているソフトウェア 6

フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント 7

サーバーモジュールの配線 8

▼ 設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する 11

サーバーモジュールの取り付け 13

取り扱い上の注意 13

静電気放電に関する注意事項 14

設置に必要なツール 14

オプションのコンポーネントの取り付け 15

モジュラーシステムシャーシの準備 15

▼ サーバーモジュールをシャーシに挿入する 16

起動中のサーバーモジュールと通信する 18

▼モジュラーシステム CMM (Web インタフェース) の Ethernet ポートを使って接続する 18

▼モジュラーシステム CMM (CLI) の Ethernet ポートを使って接続する 20

▼モジュラーシステム CMM のシリアルポートを使って接続する 21

▼サーバーモジュールのフロントパネル UCP を使用して接続する 23

▼ 診断メッセージを監視する 24

サーバーモジュールへの初めての電源投入 25

最初の電源投入の概要 25

▼ はじめてシステムの電源を入れる 26

▼ システムを構成する 27

▼ Oracle Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする 27

Oracle Solaris の構成設定 28

▼ 静的 IP アドレスをサービスプロセッサに割り当てる 29

用語集 33

索引 39

このマニュアルの使用方法

このマニュアルでは、Oracle Sun Netra 6000 モジュールシステムに Oracle Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールを取り付けるときに役立つ、作業手順、背景情報、および参考資料を示します。このマニュアルは、システムのラックへの搭載とコンピュータハードウェアの設置に精通しているシステム設置技術者および管理者向けに記述されています。このドキュメントは、オンラインで Netra SPARC T3-1B Server Module Topic Set 内の個別の PDF ファイルとして利用できます。

- [v ページの「関連ドキュメント」](#)
- [vii ページの「フィードバック」](#)
- [vii ページの「サポートとアクセシビリティ」](#)

関連ドキュメント

オンラインのドキュメントは、次の URL で参照できます。

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E21652-01&id=homepage>

用途	タイトル	形式	場所
プロダクトノート	『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールご使用にあたって』	PDF	オンライン
概要	『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールご使用の手引き』	印刷物	システムとともに出荷
設置、管理、保守	Netra SPARC T3-1B Server Module Topic Set	HTML	オンライン
インストール	『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュール設置マニュアル』	トピックセット、PDF	オンライン

用途	タイトル	形式	場所
管理	『SPARC T3 シリーズサーバー管理マニュアル』	トピック セット、 PDF	オンライン
サービス	『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールサービスマニュアル』	トピック セット、 PDF	オンライン
安全性	『Netra SPARC T3-1B Server Module Safety and Compliance Manual』	PDF	オンライン
モジュラーシステム のファーム ウェア更新	『SAS-1/SAS-2 Compatibility Upgrade Guide』	PDF	オンライン

注 – 『SPARC T3 シリーズサーバー管理マニュアル』の記載内容は、各サーバー製品およびサーバーモジュール製品に当てはまります。そのドキュメントにある具体例の一部は、このサーバーモジュール以外の製品を基にしています。

Sun Netra 6000 モジュラーシステムのドキュメントは、次の Web サイトで参照できます。

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19945-01&id=homepage>

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のその他のドキュメントは、次の URL で参照できます。

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19860-01&id=homepage>

	タイトル
ILOM 3.0 一般情報	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 入門ガイド』
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 概念ガイド』
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web インタ フェース手順ガイド』
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI 手順ガイド』
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 機能更新および リリースノート』
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 管理プロトコル リファレンスガイド』
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CMM 管理 – Sun Blade 6000/Sun Blade 6048 モジュラーシステムガイド』

フィードバック

このドキュメントについてのフィードバックは次の URL からお寄せください。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

サポートとアクセシビリティ

説明	リンク
My Oracle Support を通じた 電子的なサポートへのアク セス	http://support.oracle.com
	聴覚障害の方へ： http://www.oracle.com/accessibility/support.html
アクセシビリティに対す る Oracle のコミットメント について	http://www.oracle.com/us/corporate/accessibility/index.html
トレーニング	https://education.oracle.com

設置の計画

次に示すトピックは、サーバーモジュールの設置を計画するときに役立ちます。

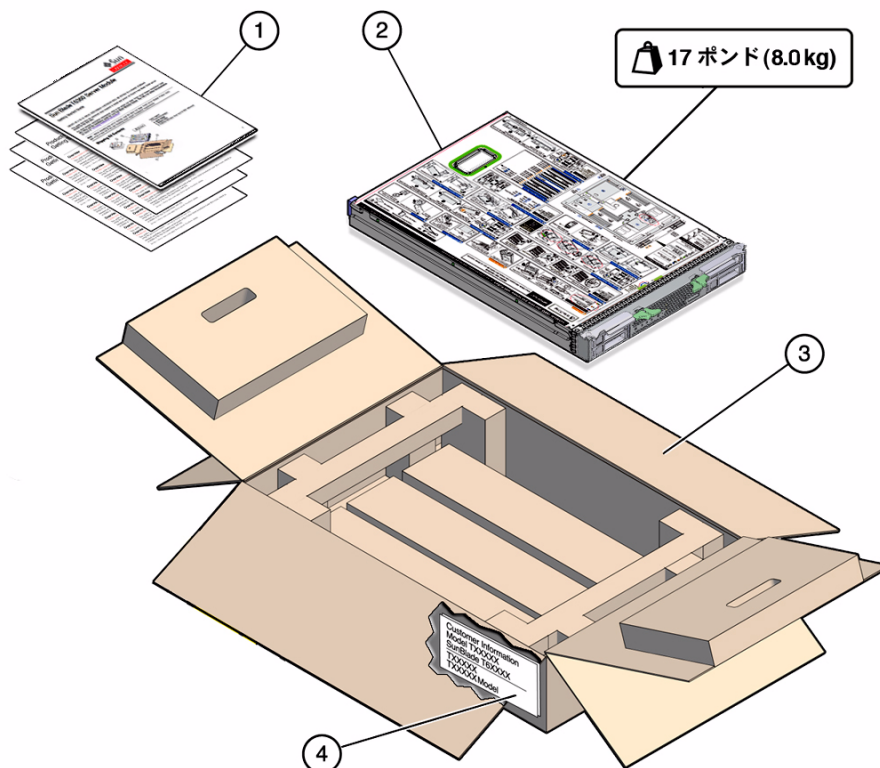
- [2 ページの「出荷キットの内容一覧」](#)
- [3 ページの「機能」](#)
- [4 ページの「仕様」](#)
- [5 ページの「設置計画」](#)
- [6 ページの「プリインストールされているソフトウェア」](#)
- [7 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」](#)
- [8 ページの「サーバーモジュールの配線」](#)
- [11 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)

関連情報

- [13 ページの「サーバーモジュールの取り付け」](#)

出荷キットの内容一覧

図: 出荷用キットの内容



図の説明

- 1 印刷物 (ご使用の手引きなど)
- 2 サーバーモジュール
- 3 出荷用梱包箱
- 4 顧客情報シート (梱包箱の外側に添付)。サーバーモジュールの MAC アドレスと、インストール済みのハードウェアおよびソフトウェアに関する情報が記載されていますので、保管しておいてください。

顧客情報シートには、サーバーモジュールにインストール済みのオプションのハードウェアとソフトウェアに関する詳細情報が記載されています。

関連情報

- [3 ページの「機能」](#)
- [4 ページの「仕様」](#)
- [5 ページの「設置計画」](#)

機能

機能	説明
プロセッサ	SPARC T3 マルチコアプロセッサ (1 個)。
メモリー	DDR3 DIMM 用スロット (16 個)。
内蔵ハードドライブ	ホットプラグ対応 2.5 インチ SAS-2 ハードドライブ (4 台まで)。
REM	RAID 拡張モジュール (ハードドライブ管理) および付属の RAID コントローラ。サポートされている REM については、『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールご使用にあたって』を参照してください。
UCP	フロントパネル内の UCP (1 個) ユニバーサルケーブル (UCP-3 または UCP-4) は、モジュラーシステムに付属しています。別個に購入することもできます。次の接続がサポートされています。 <ul style="list-style-type: none">• USB 2.0 (2 接続)• シリアル• VGA ビデオ• ローカル KVMs 対応
アーキテクチャー	SPARC V9 アーキテクチャー、ECC 保護 プラットフォームグループ: sun4v プラットフォーム名: ORCL, SPARC-T3-1B サーバーモジュール
Ethernet ポート	10/100/1Gb Intel 82576EB ポート (2 個)。
PCI I/O	PCI Express Gen2 対応 ExpressModule スロット (2 個)。
FEM	サポートされている FEM については、『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールご使用にあたって』を参照してください。
システムファームウェア	8.0.1.c (最小)。

機能	説明
オペレーティングシステム	Oracle Solaris 10 9/10 OS 以上。 Oracle Solaris 10 9/10 Patch Bundle を備えた Oracle Solaris 10 10/09 OS。 注 – サポートされている Oracle Solaris OS リリースに必要なパッチについては、『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールご使用にあたって』を参照してください。
電源	モジュラーシステムシャーシは電源を備えています。
冷却装置	モジュラーシステムシャーシは環境制御機能を備えています。

関連情報

- [4 ページの「仕様」](#)
- [5 ページの「設置計画」](#)



仕様

サーバーモジュールの物理仕様および電気仕様は次のとおりです。

物理仕様

寸法	ヤード法	メートル法
幅	13 インチ	330 mm
奥行	19.5 インチ	495 mm
高さ	1.75 インチ	45 mm
重量	17 ポンド	8.0 kg

電気仕様

寸法	値
電圧 (公称)	シャーシのバックプレーンから 12V メイン シャーシのバックプレーンから 3.3V AUX
電力 (最大)	380W (推定)

関連情報

- [3 ページの「機能」](#)
- [5 ページの「設置計画」](#)

設置計画

設置計画情報については、『Sun Netra 6000 モジュラーシステム設置ガイド』に記載されています。

サーバーモジュールに固有の環境要件は次のとおりです。

条件	要件
動作時の温度	5°C - 40°C (41°F - 104°F) 短時間の場合: -5°C - 55°C (23°F - 131°F)
動作時の相対湿度	5% - 85% (結露なし)
非動作時の温度	-40°C (-40°F) - 65°C (149°F)
短時間の場合の相対湿度	5% - 90% (結露なし)、ただし乾燥空気 1 kg 当たり の水 0.024 kg 以下 (水 0.053 ポンド/乾燥空気 2.205 ポンド)
動作時の高度	40°C で最高 3000 m、35°C で最高 4000 m
非動作時の温度	-40°C - 70°C (-40°F - 158°F)
非動作時の相対湿度	最高 93% (結露なし)、40°C (104°F)
非動作時の高度	最高 12,000 m (40,000 ft.)
音響ノイズ	動作時/アイドリング時 7.2 B (LwAd: 1 B = 10 dB)

関連情報

- [3 ページの「機能」](#)
- [4 ページの「仕様」](#)

プリインストールされているソフトウェア

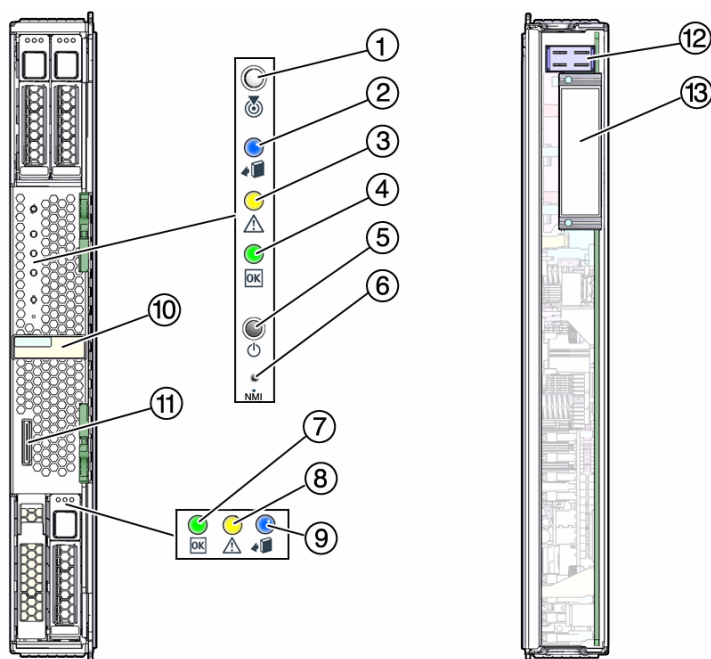
1 - 4 台のディスクドライブが事前に組み込まれたサーバーモジュールをご注文いただけます。その場合、Oracle Solaris OS およびその他のソフトウェアは、ルートハードディスクドライブ (HDD0) にインストール済みです。このサーバーモジュールにインストール済みのソフトウェアについては、『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールご使用にあたって』を参照してください。インストール済みのソフトウェアは、サーバーモジュールのパッケージに添付されている顧客情報シートに記載されています。

関連情報

- [28 ページの「Oracle Solaris の構成設定」](#)
- [27 ページの「Oracle Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする」](#)
- [2 ページの「出荷キットの内容一覧」](#)

フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント

図: フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント



図の説明

- 1 白色 LED: ロケータ (物理的なプレゼンススイッチとして機能)
- 2 青色 LED: 取り外し可能
- 3 オレンジ色 LED: 保守要求
- 4 緑色 LED: OK
- 5 電源ボタン
- 6 リセットボタン: NMI (保守専用)
- 7 緑色 LED: ドライブ OK
- 8 オレンジ色 LED: ドライブ保守要求
- 9 青色 LED: ドライブ取り外し可能
- 10 RFID (ステッカーがサーバーモジュールのシリアル番号を示します)
- 11 UCP
- 12 シャーシの電源コネクタ
- 13 シャーシのデータコネクタ

関連情報

- [8 ページの「サーバーモジュールの配線」](#)

サーバーモジュールの配線

通常のシステム運用時にはサーバーモジュールにケーブルを接続しません。設定、テスト、または保守が目的の場合は、サーバーモジュールにケーブルを直接接続することができます。そのためにはまず、サーバーモジュールのフロントパネルにある UCP にドングルケーブルを接続します。

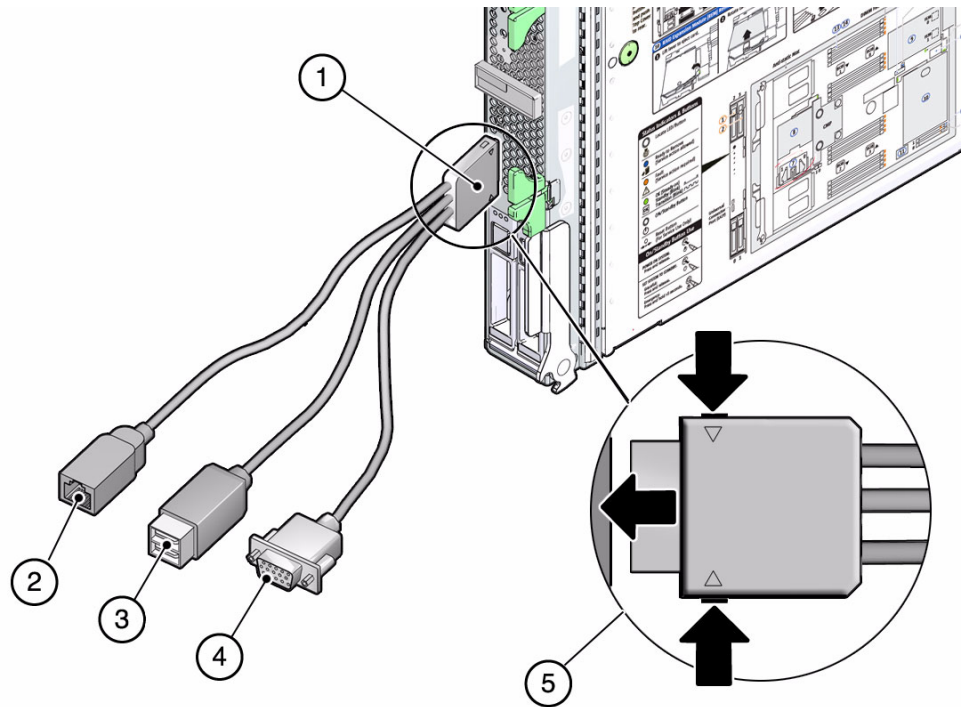


注意 – ドングルケーブルは、設定、テスト、または保守のために使用し、使用しないときは取り外すようにしてください。ドングルケーブルは、電磁適合性の遵守に関して評価されていないため、通常のシステム運用時には使用しないでください。

モジュラーシステムシャーシに付属のドングルケーブルを使用するか、サーバーモジュールと一緒にオプションのドングルケーブルをご注文いただけます。

ドングルケーブルは、コネクタ数が 3 つまたは 4 つの 2 種類あります。できるだけ、4 コネクタ (UCP-4) ではなく、3 コネクタ (UCP-3) のドングルケーブルを使用してください。

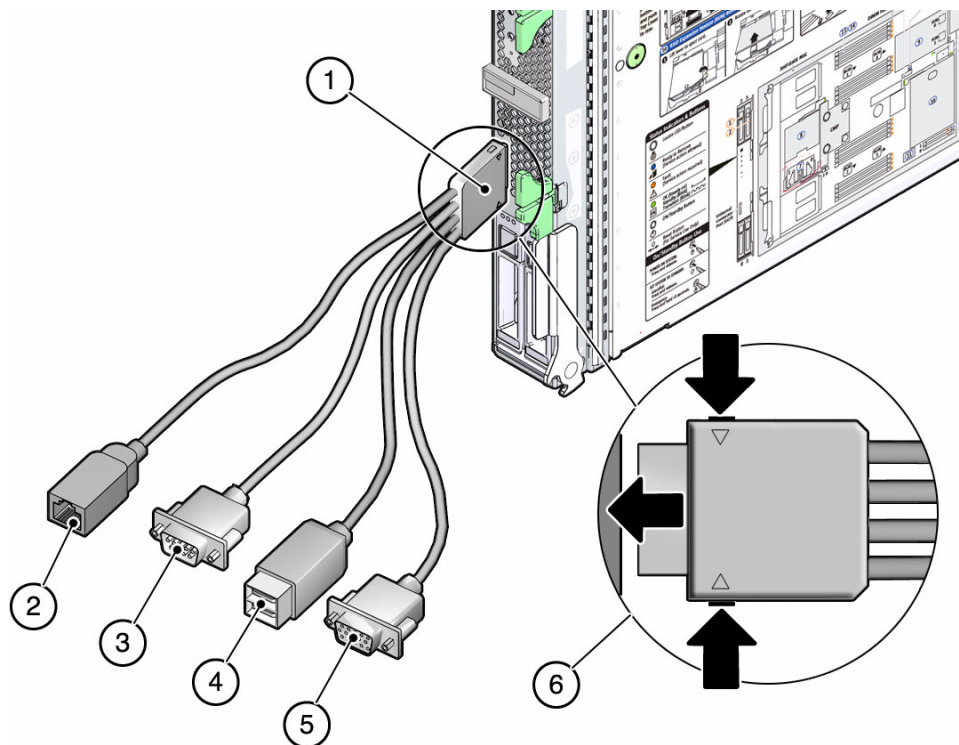
図: UCP-3 ドングルケーブル (3 コネクタ)



図の説明

-
- | | |
|---|------------------------------|
| 1 | サーバーモジュール UCP に接続されたドングルコネクタ |
| 2 | RJ-45 シリアルコネクタ |
| 3 | USB 2.0 (2 コネクタ) |
| 4 | VGA 15 ピンコネクタ (メス) |
| 5 | 挿入およびリリースボタン |
-

図: UCP-4 ドングルケーブル (4 コネクタ)



図の説明

- 1 サーバモジュール UCP に接続されたドングルコネクタ
- 2 RJ-45 シリアルコネクタ (UCP-4 のものは使用しないでください)
- 3 DB-9 シリアルオスコネクタ (TTYA)
- 4 USB 2.0 (2 コネクタ)
- 5 VGA 15 ピンコネクタ (メス)
- 6 挿入およびリリースボタン

UCP-3 および UCP-4 ドングルケーブルにはいずれも、USB 2.0 接続 (2 コネクタ) と HD-15 コネクタ (メス) が付いています。シリアルコネクタは UCP-3 と UCP-4 とで異なります。

- UCP-3 ドングルケーブルは RJ-45 コネクタを備えています。
- UCP-4 ドングルケーブルは RJ-45 コネクタを備えていますが、このサーバモジュールでは使用できません。代わりに、UCP-4 の DB-9 コネクタを使用します。RJ-45 接続が必要な場合は、オプションの DB-9/RJ-45 アダプタを DB-9 コネクタに接続します。

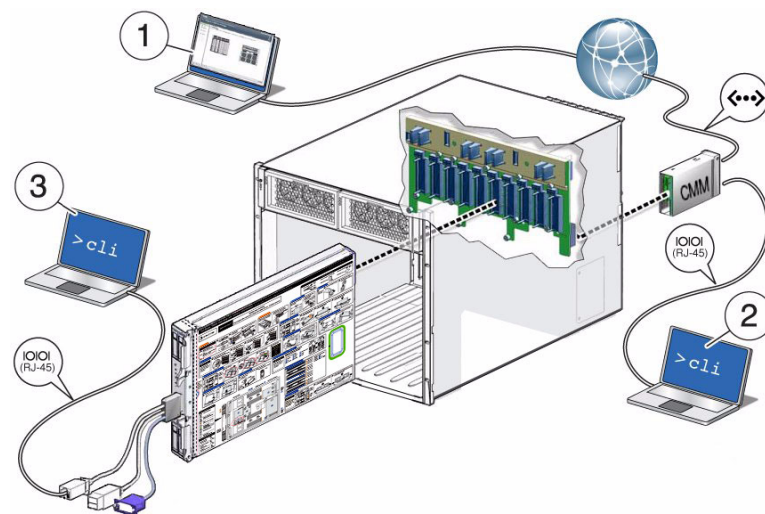
関連情報

- 7 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」
- 11 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」
- 23 ページの「サーバーモジュールのフロントパネル UCP を使用して接続する」

▼ 設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する

初期設置中のサーバーモジュールと通信する方法はいくつかあります。使用する方法について計画してください。設置を行う前に、選択した方法に必要な装置、情報、およびアクセス権を用意します。

- サーバーモジュール SP と通信するための接続方法をいずれか 1 つ選択します。
接続方法を下記の図に示し、その説明を表にまとめています。選択した方法に必要なケーブル、監視デバイス、アドレス、およびパスワードを用意します。



方法	接続の説明	接続の要件	サポートされるインタフェース
1	Ethernet 接続元: CMM NET MGT ポート 接続先: 使用中のネットワーク	CMM NET MGT ポートを使用中のネットワークに接続します。 CMM とサーバーモジュール SP の両方の IP アドレスを入手しておいてください。 ネットワークからは、CMM の IP アドレスを使用して、CMM 上の Oracle ILOM にログインする必要があります。次に、Oracle ILOM プロキシを使用して、サーバーモジュールの SP ILOM インタフェースに移動できます。	Oracle ILOM CLI または CMM ILOM Web インタフェース
2	シリアル 接続元: CMM SER MGT ポート 接続先: 端末デバイス	CMM SER MGT RJ-45 ポートに接続された端末デバイス。この接続から、Oracle ILOM を使用して、サーバーモジュールの SP ILOM インタフェースに移動できます。	Oracle ILOM CLI
3	シリアル 接続元: サーバーモジュール SP UCP ポート (ドングルが必要) 接続先: 端末デバイス	サーバーモジュールに直接接続する UCP-3 ドングルケーブルと、ドングルケーブル上の RJ-45 コネクタに接続する端末デバイス。	Oracle ILOM CLI

関連情報

- [18 ページの「モジュラーシステム CMM \(Web インタフェース\) の Ethernet ポートを使って接続する」](#)
- [21 ページの「モジュラーシステム CMM のシリアルポートを使って接続する」](#)
- [23 ページの「サーバーモジュールのフロントパネル UCP を使用して接続する」](#)
- [7 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」](#)
- [8 ページの「サーバーモジュールの配線」](#)

サーバーモジュールの取り付け

次に示すトピックでは、サーバーモジュールをモジュラーシステムに取り付け、はじめて電源を入れるまでの手順を示します。

- [13 ページの「取り扱い上の注意」](#)
- [14 ページの「静電気放電に関する注意事項」](#)
- [14 ページの「設置に必要なツール」](#)
- [15 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」](#)
- [15 ページの「モジュラーシステムシャーシの準備」](#)
- [16 ページの「サーバーモジュールをシャーシに挿入する」](#)
- [18 ページの「起動中のサーバーモジュールと通信する」](#)
- [24 ページの「診断メッセージを監視する」](#)

関連情報

- [25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」](#)

取り扱い上の注意

- サーバーモジュールを運ぶときは両方の手を使ってください。
- フロントパネルの取り外しレバーを引き出すのは、手順の実行において必要なときだけにしてください。

関連情報

- [14 ページの「静電気放電に関する注意事項」](#)

静電気放電に関する注意事項

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーモジュールを取り付けるときは、アースされた静電気防止用リストストラップ、フットストラップ、または同等の安全器具を使用して、静電気による損傷 (ESD) を防いでください。



注意 – 電子コンポーネントが静電気によって損傷すると、システムが永続的に使用できなくなるか、保守技術者による修復が必要になる可能性があります。電子コンポーネントを静電気による損傷から保護するには、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面にコンポーネントを置いてください。システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電気防止用アースストラップを着用してください。

関連情報

- [13 ページの「取り扱い上の注意」](#)
- [14 ページの「設置に必要なツール」](#)

設置に必要なツール

サーバーモジュールを取り付けるときは、サーバーモジュールの内部にコンポーネントを取り付ける必要があるかどうかにかかわらず、次の工具があれば十分です。

- 静電気防止用マット
- 静電気防止用リストストラップ
- UCP-3 または UCP-4 ドングルケーブル
- 端末または端末エミュレータ
- スタイラス (電源ボタンの押下用)

関連情報

- [15 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」](#)
- [8 ページの「サーバーモジュールの配線」](#)
- [13 ページの「取り扱い上の注意」](#)
- [14 ページの「静電気放電に関する注意事項」](#)

オプションのコンポーネントの取り付け

サーバーモジュールの初期構成の一部としてご注文いただくオプションコンポーネントは、サーバーモジュールに取り付けられた状態で出荷されます。このようなオプションコンポーネントは、サーバーモジュールのパッケージに添付の顧客情報シートに記載されています。

ただし、オプションコンポーネントを別個にご注文いただいた場合は、サーバーモジュールをモジュラーシステムシャーシに取り付ける前に、そのオプションコンポーネントをサーバーモジュールに取り付ける必要があります。オプションコンポーネントの取り付け方法については、『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールサービスマニュアル』を参照してください。

オプションコンポーネントが取り付けられていることを確認し、サーバーモジュールのカバーを閉じたら、[13 ページの「サーバーモジュールの取り付け」](#)の作業を続けます。

関連情報

- [14 ページの「設置に必要なツール」](#)

モジュラーシステムシャーシの準備

サーバーモジュールを取り付ける前に、Sun Netra 6000 モジュラーシステムを設置および構成する必要があります。モジュラーシステムはシャーシと呼ばれることもあります。この準備作業では、モジュラーシステムの CMM と、CMM にインストール済みの CMM ILOM ファームウェアを構成します。モジュラーシステムと CMM ILOM の準備については、『Sun Netra 6000 モジュラーシステム設置ガイド』を参照してください。

注 – このサーバーモジュールは SAS-2 コンポーネントです。すべての SAS-1 コンポーネント (SAS-1 NEM やディスクモジュールなど) のファームウェアを、SAS-1 と SAS-2 の共存をサポートするバージョンにアップグレードする必要があります。このファームウェアアップグレードが完了してから、サーバーモジュールまたはその他の SAS-2 コンポーネントをモジュラーシステムシャーシに取り付けてください。ファームウェアのアップグレードについては、『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールご使用にあたって』を参照してください。

関連情報

- [16 ページの「サーバーモジュールをシャーシに挿入する」](#)

▼ サーバーモジュールをシャーシに挿入する

1. サーバーモジュールの物理的な取り付けが済んだら、サーバーモジュールとの通信の準備をできるだけ早く進めます。

電源の入ったモジュラーシステムにサーバーモジュールを挿入するとすぐに、サーバーモジュールに電源が供給され、サービスプロセッサによってメッセージが生成されます。[18 ページの「起動中のサーバーモジュールと通信する」](#)で紹介するいずれかの方法を使って、接続の準備をします。

2. サーバーモジュールの MAC アドレスとシリアル番号が手元にあることを確認します。

これらの情報は、出荷用コンテナに添付の顧客情報シートに記載されています。シリアル番号は、サーバーモジュールのフロントパネル上にある RFID ラベルにも記載されています。MAC アドレスは OBP バナーにも表示されています。

3. モジュラーシステムシャーシに電源が投入されていることを確認します。

Sun Netra 6000 モジュラーシステムのドキュメントを参照してください。

4. サーバーモジュールの背面コネクタから保護カバーを取り外します。

5. サーバーモジュールの取り付け先となるシャーシのスロットを確認します。

サーバーモジュールを挿入する直前まで、スロットのフィラーパネルは取り外さないでください。モジュラーシステム内の通気、熱、電磁妨害を正しい状態に保つため、すべてのスロットにサーバーモジュールまたはフィラーパネルが入った状態にすることをお勧めします。

6. (省略可能) サーバーモジュールまたはシャーシ CMM にケーブルを接続して、サーバーモジュールからのメッセージを表示できるようにします。

電源の入ったシャーシにサーバーモジュールを挿入するとすぐに、診断メッセージが生成されます。[11 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」](#)を参照してください。

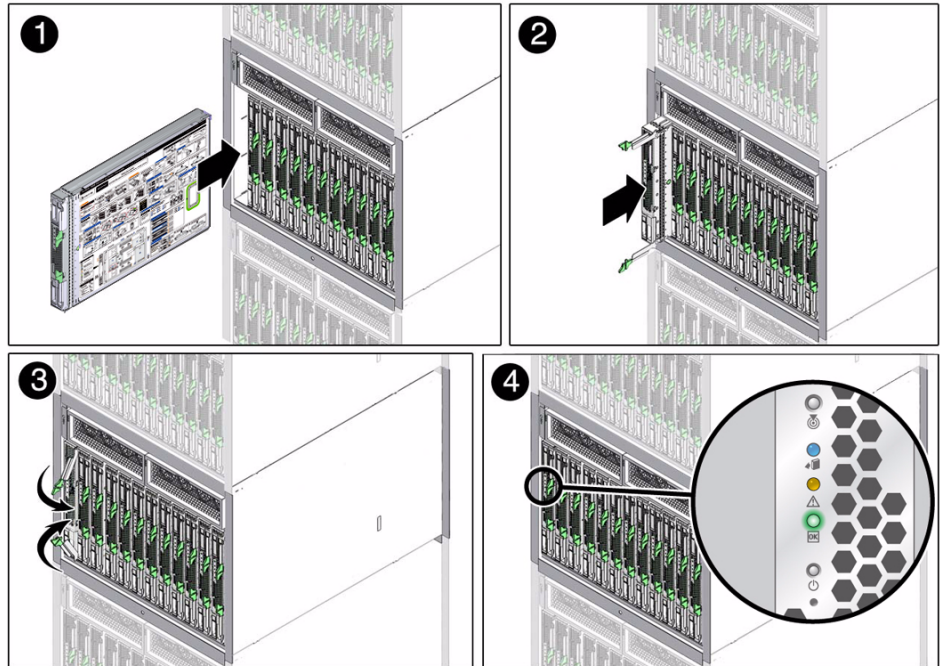
7. 選択したシャーシスロットからフィラーパネルを取り外します。

フィラーパネルの取り外しレバーを引き出して、シャーシからパネルをまっすぐに引き抜きます。



注意 – フィラーパネルを取り外してから 60 秒以内にサーバーモジュールを挿入できるようにしてください。

8. 取り外しレバーが右側になるように、両方の手でサーバーモジュールを縦にします。
図のパネル 1 を参照してください。



9. サーバーモジュールを空のスロットに入れ、シャーシの前面から約 1.5 cm (0.5 インチ) 手前の位置まで押し込みます。
図のパネル 2 を参照してください。
10. 取り外しレバーを押し、カチッと音を立ててかみ合うまで押し下げます。
図のパネル 2 と 3 を参照してください。
11. サーバーモジュールに電源が入ったら、診断メッセージを確認します。
電源の入ったシャーシにサーバーモジュールを挿入した直後、サーバーモジュールはスタンバイモードに入り、Oracle ILOM サービスプロセッサが初期化されます。フロントパネルの LED が 3 回点滅したあと、緑色の OK LED が数分間点滅します。図のパネル 4 を参照してください。

関連情報

- [25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」](#)
- [7 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」](#)

起動中のサーバーモジュールと通信する

11 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」で選択した接続方法に基づいて、次のいずれかの手順を実行します。

- 18 ページの「モジュラーシステム CMM (Web インタフェース) の Ethernet ポートを使って接続する」
- 20 ページの「モジュラーシステム CMM (CLI) の Ethernet ポートを使って接続する」
- 21 ページの「モジュラーシステム CMM のシリアルポートを使って接続する」
- 23 ページの「サーバーモジュールのフロントパネル UCP を使用して接続する」

関連情報

- 11 ページの「設置中のサーバーモジュールとの通信を計画する」
- 7 ページの「フロントパネルおよび背面パネルのコンポーネント」
- 8 ページの「サーバーモジュールの配線」

▼ モジュラーシステム CMM (Web インタフェース) の Ethernet ポートを使って接続する

CMM には、RJ-45 NET MGT 0 Ethernet ポートを介して接続できます。この Ethernet 接続は CMM SP との CLI および Web インタフェースの両方をサポートしていますが、ここで紹介するインストール手順では Web インタフェースを使用します。

1. 接続する CMM とサーバーモジュール SP の IP アドレスを確認します。
2. 使用中のネットワークに CMM が接続されていることを確認します。
ネットワーク接続は、CMM 上の NET MGT ラベルの付いた RJ-45 コネクタを通して行われます。
3. モジュラーシステムと同じネットワーク上にあるブラウザから、CMM の IP アドレスを入力します。
たとえば、CMM の IP アドレスが 129.99.99.99 であれば、このアドレスを入力します。Oracle ILOM のログインウィンドウが表示されます。
4. ユーザー名とパスワードを入力して、CMM で Oracle ILOM にログインします。
出荷時のデフォルトでは、Oracle ILOM の root のパスワードは、changeme です。
これで CMM ILOM Web インタフェースにログインしました。

5. サーバーモジュール SP に移動します。
 - a. モジュラーシステムのシャーシビューを選択します。
 - b. モジュラーシステムに取り付けたサーバーモジュールの画像をクリックします。
モジュラーシステムのスロットには 0 - 9 の番号が付いています。
6. トップメニューで「Remote Control (遠隔制御)」を選択します。
ビデオリダイレクトまたはシリアルリダイレクトのいずれかを選択できます。
7. 遠隔コンソールを起動します。
 - a. 「Redirection (リダイレクト)」タブを選択します。
 - b. 「Use serial redirection (シリアルリダイレクトを使用する)」をクリックします。
 - c. 「Launch Remote Console (リモートコンソールの起動)」をクリックします。
8. サーバーモジュールの電源を入れます。
 - a. 「Remote Power Control」タブを選択します。
 - b. このタブのメニューから「Power On (電源投入)」を選択します。
 - c. 「Save (保存)」を選択します。
 - d. 「Are you sure you want to perform a Power On of the server? (サーバーの電源投入を行なってもよろしいですか)」というプロンプトが表示されたら、「OK (OK)」を選択します。
サーバーモジュールホストにはじめて電源が入ります。
9. この段階まで来たら、目的どおりに Oracle Solaris OS を構成できます。
[27 ページの「システムを構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」](#)
- [20 ページの「モジュラーシステム CMM \(CLI\) の Ethernet ポートを使って接続する」](#)

▼ モジュラーシステム CMM (CLI) の Ethernet ポートを使って接続する

CMM には、RJ-45 NET MGT 0 Ethernet ポートを介して接続できます。この Ethernet 接続は CMM SP との CLI および Web インタフェースの両方をサポートしていますが、ここで紹介するインストール手順では CLI を使用します。

1. 接続する CMM とサーバーモジュール SP の IP アドレスを確認します。
2. 使用中のネットワークに CMM が接続されていることを確認します。
ネットワーク接続は、CMM 上の NET MGT ラベルの付いた RJ-45 コネクタを通して行われます。
3. SSH クライアントを使用して CMM にログインします。

```
$ ssh root@ipaddress
```

CMM の IP アドレスで *ipaddress* を置き換えます。

4. プロンプトが表示されたら、CMM ILOM root アカウントのパスワードを入力します。

出荷時のデフォルトでは、Oracle ILOM の root のパスワードは、changeme です。

```
Password: CMM_ILOM_password
Oracle(TM) Integrated Lights Out Manager
Version 3.x.x
...
Warning: password is set to factory default.
->
```

これで、CMM ILOM の CLI にログインしました。

注 – CMM ILOM からログアウトする準備ができたなら、exit と入力します。

5. サーバーモジュール SP に移動します。

```
-> cd /CH/BLn/SP/cli
```

ターゲットサーバーモジュールが取り付けられているモジュラーシステムのシャーシスロットを示す番号で *n* を置き換えます。

6. サーバーモジュール SP にアクセスします。

```
-> start
Are you sure you want to start /CH/BLn/SP/cli (y/n)? y
start: Connecting to /CH/BLn/SP/cli as user root
```

サーバーモジュール SP 上で root ユーザーのパスワードを入力するよう求められたら、**changeme** (出荷時のデフォルトパスワード) と入力します。

これで、サーバーモジュール SP 上の Oracle ILOM にログインしました。

7. サーバーモジュールホストにはじめて電源を入れる操作に移ります。

[25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」](#)を参照してください。

関連情報

- [25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」](#)
- [18 ページの「モジュラーシステム CMM \(Web インタフェース\) の Ethernet ポートを使って接続する」](#)

▼ モジュラーシステム CMM のシリアルポートを使って接続する

サーバーモジュール SP にアクセスするには、まず、シャーシ上の RJ-45 シリアルポートに接続された端末または端末エミュレータを使用して、シャーシの CMM ILOM にアクセスします。次に、CMM ILOM ソフトウェアの CLI を使用してサーバーモジュール SP に接続できます。

1. シャーシに接続する端末、ノートパソコン、または端末サーバーが動作していることを確認します。
2. 端末デバイスまたは端末エミュレーションソフトウェアを次の設定で構成します。
 - 8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)
 - 9600 ボー (デフォルト。標準速度は最大 57600 まで設定できます)
 - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)
3. シャーシのシリアルポートから端末デバイスにシリアルケーブルを接続します。
シリアルポートの位置については、モジュラーシステムシャーシのドキュメントを参照してください。

シリアルポートには次のピン配列を備えたケーブルが必要です。

ピン	信号の説明
1	送信要求 (Request To Send、RTS)
2	データ端末レディー (Data Terminal Ready、DTR)
3	送信データ (TXD)
4	接地
5	接地
6	受信データ (RXD)
7	データキャリア検出 (Data Carrier Detect、DCD)
8	送信可 (Clear To Send、CTS)

4. 端末装置で Enter キーを押します。

端末デバイスと CMM の間の接続が確立されます。端末またはエミュレータの電源投入完了前または電源投入シーケンス中に端末またはエミュレータをシリアルポートに接続すると、起動メッセージが表示されます。システムの起動が完了すると、CMM ILOM ソフトウェアにログインプロンプトが表示されます。

```
SUNCMMnnnnnnnnnnnnnnnn login:
```

プロンプトの先頭文字列はデフォルトのホスト名です。ホスト名は接頭辞 SUNCMM のあとに CMM ILOM の MAC アドレスが続きます。各サービスプロセッサの MAC アドレスは一意です。

5. ユーザー名とパスワードを入力して、CMM で Oracle ILOM にログインします。

出荷時のデフォルトでは、Oracle ILOM の root のパスワードは、changeme です。

これで CMM ILOM Web インタフェースにログインしました。

ログインに成功すると、CMM ILOM に次のデフォルトのコマンドプロンプトが表示されます。

```
->
```

6. サーバーモジュール Oracle ILOM に移動します。

```
-> cd /CH/BLn/SP/cli
```

このコマンドでは、シャーシ内のこのサーバーモジュールを表すスロット ID 番号 (最小は 0) を BL に続けて指定します。

7. start コマンドを入力します。

```
-> start
```

プロンプトが表示されます。

8. y を入力して続行します。

サーバーモジュール SP 上で動作している Oracle ILOM ソフトウェアによって、サーバーモジュール SP に固有のパスワードを入力するよう求めるプロンプトが表示されます。

注 – CMM ILOM は、/CH/BL *n*/SP/cli (*n* はサーバーモジュールが取り付けられたスロット) の下にある user ターゲットのユーザー名を使用して、サーバーモジュール Oracle ILOM にログインします。

9. プロンプトが表示されたら、パスワードを入力します。

デフォルトのパスワードは changeme です。

これで、サーバーモジュール SP 上の Oracle ILOM にログインしました。サーバーモジュールホストにはじめて電源を入れる操作に移ることができます。25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」を参照してください。

関連情報

- 25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」

▼ サーバーモジュールのフロントパネル UCP を使用して接続する

サーバーモジュール SP に直接アクセスするには、サーバーモジュール前面の UCP にドングルケーブルを接続します。



注意 – ドングルケーブルは、設定、テスト、または保守のために使用し、使用しないときは取り外すようにしてください。ドングルケーブルは、電磁適合性の遵守に関して評価されていないため、通常のシステム運用時には使用しないでください。

1. 端末デバイスまたは端末エミュレーションソフトウェアを次の設定で構成します。
 - 8N1 (データビット 8、パリティなし、ストップビット 1)
 - 9600 ボー (デフォルト。標準速度は最大 57600 まで設定できます)
 - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)

2. サーバーモジュールのフロントパネルにあるユニバーサルコネクタポート (UCP) にドングルケーブルを接続します。
可能であれば、4 コネクタの UCP-4 ではなく、3 コネクタの UCP-3 ドングルケーブルを使用してください。UCP とドングルケーブルについては、[8 ページの「サーバーモジュールの配線」](#)を参照してください。
3. 端末または端末エミュレータをドングルケーブルに接続します。
 - UCP-3 ドングルケーブルの場合、RJ-45 コネクタを使用します。
 - UCP-4 ドングルケーブルの場合、DB-9 シリアルコネクタ (TTYA) を使用します。UCP-4 に RJ-45 で接続する必要がある場合は、DB-9 コネクタに接続する DB-9/RJ-45 アダプタを使用してください。端末または端末エミュレータに Oracle ILOM ログインプロンプトが表示されます。
4. プロンプトが表示されたら、ユーザー名とパスワードを入力します。
デフォルトのユーザーは root です。デフォルトのパスワードは changeme です。
これで、サーバーモジュール SP 上の Oracle ILOM にログインしました。サーバーモジュールホストにはじめて電源を入れる操作に移ることができます。[25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」](#)を参照してください。

関連情報

- [25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」](#)
- [24 ページの「診断メッセージを監視する」](#)

▼ 診断メッセージを監視する

モジュラーシステムが電源に接続されている場合、サーバーモジュールをシャーシに挿入するとただちにスタンバイモードに入ります。Oracle ILOM サービスプロセッサが初期化され、診断メッセージがすぐに表示されます。

- サーバーモジュールのサービスプロセッサに対して行なった接続について表示されるメッセージを確認します。
サーバーモジュールのどの部分がメッセージで言及されているのかを判断しやすくする方法については、『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールサービスマニュアル』を参照してください。

関連情報

- [25 ページの「サーバーモジュールへのはじめての電源投入」](#)

サーバーモジュールへのはじめての電源投入

サーバーモジュールをモジュラーシステムに取り付けたら、はじめて電源を入れ、構成を開始できます。

- [25 ページの「最初の電源投入の概要」](#)
- [26 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」](#)
- [27 ページの「システムを構成する」](#)
- [27 ページの「Oracle Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする」](#)
- [28 ページの「Oracle Solaris の構成設定」](#)
- [29 ページの「静的 IP アドレスをサービスプロセッサに割り当てる」](#)

関連情報

- [1 ページの「設置の計画」](#)
 - [13 ページの「サーバーモジュールの取り付け」](#)
-

最初の電源投入の概要

電源の入ったモジュラーシステムにサーバーモジュールを挿入するとすぐに、次に示す段階が続きます。

1. サーバーモジュールの SP に電源が供給され、SP がアクティブになります。
2. SP によって診断が行われ、Oracle ILOM ファームウェアが初期化されます。診断メッセージと状態メッセージが SP によって即座に生成されます。
3. ログインを求めるプロンプトが SP に表示されます。このあと、-> プロンプトでコマンドを入力できます。
4. Oracle ILOM コマンドを入力すると、サーバーモジュールが起動し、Oracle Solaris OS の初期化と構成が開始されます。

関連情報

- [26 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」](#)
- [27 ページの「システムを構成する」](#)

▼ はじめてシステムの電源を入れる

1. サーバーモジュールの Oracle ILOM プロンプトで、次のように入力します。

```
-> start /SYS
Are you sure you want to start /SYS (y/n)? y
Starting /SYS. . .
```

サーバーモジュールが初期化されます。

2. 通信をサーバーモジュールホストに切り替えます。

Oracle ILOM プロンプトが表示されたら、次のように入力します。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started. To stop, type #.
...
```

サーバーモジュールで POST を完了するのに、数分かかることがあります。
Oracle Solaris OS がインストールされている起動デバイスにローカルからアクセスできる場合は、サーバーモジュールが起動します。ローカルからアクセスできない場合、システムは `boot net` コマンドを使用して、ネットワーク上の起動デバイスを検索します。

これで、サーバーモジュールのホストに接続しました。

サーバーモジュールハードウェアの設置はこれで完了です。

3. 目的どおりに Oracle Solaris OS を構成します。

[27 ページの「システムを構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [27 ページの「システムを構成する」](#)

▼ システムを構成する

次の手順は、サーバーモジュールのスロット HDD0 のハードディスクドライブにインストール済みの Oracle Solaris OS ソフトウェアを使用していることが前提となります。Oracle Solaris OS を別の方法でインストールする場合は、Oracle Solaris OS のインストールを完了してから、次の手順を再開してください。

- Oracle Solaris インストールプロセスの構成に関する質問に答えます。
28 ページの「Oracle Solaris の構成設定」に従って、計画した構成の内容を確認します。

関連情報

- 27 ページの「Oracle Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする」
- 29 ページの「静的 IP アドレスをサービスプロセッサに割り当てる」

▼ Oracle Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする

インストール済みの Oracle Solaris OS 以外の Oracle Solaris OS ソフトウェアを使用する場合は、ネットワークから OS をインストールできます。

- 使用する予定の Oracle Solaris OS のバージョンについては、『Solaris インストールガイド (ネットワークインストール)』を参照してください。

このマニュアルは、次の URL から入手できます。

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19253-01&id=homepage>

このマニュアルには、ネットワーク上の JumpStart サーバーを使用した OS のインストールに関する情報が記載されています。

関連情報

- 28 ページの「Oracle Solaris の構成設定」

Oracle Solaris の構成設定

サーバーモジュール上で Oracle Solaris OS を構成する場合は、次の構成パラメータを指定するように求められます。

パラメータ	説明
Language	表示された言語の一覧から番号を選択します。
Locale	表示された地域の一覧から番号を選択します。
Terminal Type	使用している端末デバイスに対応する端末のタイプを選択します。
Network?	「Yes」を選択します。
Multiple Network Interfaces	構成する予定のネットワークインタフェースを選択します。構成するネットワークインタフェースが不明である場合は、一覧の先頭のネットワークインタフェースを選択します。
DHCP?	使用しているネットワーク環境に応じて、「Yes」または「No」を選択します。
Host Name	サーバーのホスト名を入力します。
IP Address	この Ethernet インタフェースの IP アドレスを入力します。
Subnet?	使用しているネットワーク環境に応じて、「Yes」または「No」を選択します。
Subnet Netmask	Subnet? で「Yes」を選択した場合は、使用しているネットワーク環境のサブネットのネットマスクを入力します。
IPv6?	IPv6 を使用するかどうかを指定します。IPv6 を使用するかどうか不明である場合は、「No」を選択して IPv4 用の Ethernet インタフェースを構成します。
Security Policy	標準の UNIX セキュリティ (No) または Kerberos セキュリティ (Yes) のいずれかを選択します。セキュリティが不明である場合は、「No」を選択します。
Confirm	画面上の情報を確認し、必要に応じて変更します。それ以外の場合は、処理を続行します。
Name Service	使用しているネットワーク環境に応じて、ネームサービスを選択します。 注 — 「None」以外のネームサービスを選択すると、追加のネームサービスの構成情報の入力を求めるプロンプトが表示されます。
NFSv4 Domain Name	使用している環境に応じて、ドメイン名構成のタイプを選択します。ドメイン名構成が不明である場合は、「Use the NFSv4 domain derived by the system」を選択します。
Time Zone (Continent)	該当する大陸を選択します。
Time Zone (Country or Region)	該当する国または地域を選択します。

Time Zone	タイムゾーンを選択します。
Date and Time	デフォルトの日付と時刻を受け入れるか、値を変更します。
root Password	root パスワードを 2 回入力します。このパスワードは、このサーバーの Oracle Solaris OS のスーパーユーザーアカウント用です。このパスワードは、SP のパスワードではありません。

関連情報

- [27 ページの「システムを構成する」](#)
- [27 ページの「Oracle Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする」](#)
- [29 ページの「静的 IP アドレスをサービスプロセッサに割り当てる」](#)

▼ 静的 IP アドレスをサービスプロセッサに割り当てる

Oracle Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールが接続されているネットワークが IP アドレス指定で DHCP をサポートしていない場合は、この手順を実行します。

1. 静的 IP アドレスを受け入れるように SP を設定します。

```
-> set /SP/network pendingipdiscovery=static
Set 'pendingipdiscovery' to 'static'
```

2. SP の IP アドレスを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipaddress=service-processor-IPaddr
Set 'pendingipaddress' to 'service-processor-IPaddr'
```

3. SP ゲートウェイの IP アドレスを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipgateway=gateway-IPaddr
Set 'pendingipgateway' to 'gateway-IPaddr'
```

4. SP のネットマスクを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipnetmask=255.255.255.0
Set 'pendingipnetmask' to '255.255.255.0'
```

この例では、255.255.255.0 を使用してネットマスクを設定します。ご使用のネットワーク環境のサブネットでは、異なるネットマスクが必要になる場合があります。使用している環境にもっとも適したネットマスク番号を使用してください。

5. show /SP/network コマンドを使用して、パラメータが適切に設定されたことを確認します。

```
-> show /SP/network
/SP/network
Targets:
Properties:
  commitpending = (Cannot show property)
  dhcp_server_ip = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipaddress = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipdiscovery = dhcp
  ipgateway = xxx.xxx.xxx.xxx
  ipnetmask = 255.255.252.0
  macaddress = 00:14:4F:3F:8C:AF
  pendingipaddress = xxx.xxx.xxx.xxx
  pendingipdiscovery = static
  pendingipgateway = xxx.xxx.xxx.xxx
  pendingipnetmask = 255.255.255.0
  state = enabled
Commands:
  cd
  set
  show
->
```

6. SP のネットワークパラメータに対する変更を確定します。

```
-> set /SP/network commitpending=true
Set 'commitpending' to 'true'
```

注 - set /SP/network commitpending=true コマンドを実行したあとで、show /SP/network コマンドを再度実行すると、パラメータが更新されたことを確認できます。

7. Oracle Solaris OS を構成するときの静的 IP アドレスを設定します。

[27 ページの「システムを構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [26 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」](#)
- [27 ページの「システムを構成する」](#)
- [28 ページの「Oracle Solaris の構成設定」](#)

用語集

A

Administration (管理) PDF ブック『SPARC T3 シリーズサーバー管理マニュアル』に対応する HTML トピックセットの部分のタイトル。

ANSI SIS American National Standards Institute Status Indicator Standard (米国規格協会 状態インジケータ規格)。

ASR Automatic System Recovery (自動システム回復)。

B

blade (ブレード) サーバーモジュールおよびストレージモジュールの一般名称。

blade server
(ブレードサーバー) サーバーモジュール。

C

chassis (シャーシ) モジュラーシステムの格納装置。

CLI コマンド行インタフェース。

CMM シャーシ監視モジュール。ILOM はモジュラシステムシャーシ内のコンポーネントの完全自動管理を提供する CMM 上で動作します。[Oracle ILOM](#) を参照してください。

CMM ILOM CMM で実行される ILOM。[Oracle ILOM](#) を参照してください。

CRU 顧客交換可能ユニット。

D

DHCP 動的ホスト構成プロトコル。

disk module
(ディスクモジュール)
または disk blade
(ディスクブレード) ストレージモジュールの別名。

DTE Data Terminal Equipment (データ端末装置)。

E

ESD Electrostatic Discharge (静電放電)。

F

FEM ファブリック拡張モジュール。FEM により、サーバーモジュールは特定の NEM によって提供される 10GbE 接続を使用できます。[NEM](#) を参照してください。

FRU Field-Replaceable Unit (現場交換可能ユニット)。

H

HBA ホストバスアダプタ。[REM](#) を参照してください。

ILOM [Oracle ILOM](#) を参照してください。

ID PROM サーバーモジュールのシステム情報が格納されたチップ。

Installation
(インストール) PDF ブック『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュール設置マニュアル』に対応する HTML トピックセットの部分のタイトル。

IP Internet Protocol (インターネットプロトコル)。

K

KVM キーボード、ビデオ、マウス。複数のコンピュータで 1 つのキーボード、1 つのディスプレイ、1 つのマウスを共有するには、スイッチの使い方を参照してください。

M

MAC または
MAC アドレス メディアアクセス制御アドレス。

MSGID Message ID (メッセージ ID)。

N

name space (名前空間) 最上位の ILOM CMM ターゲット。

NEM Network Express Module。NEM は、10/100/1000 イーサネット、10GbE イーサネットポート、および SAS 接続をストレージモジュールに提供します。

NET MGT ネットワーク管理ポート。CMM およびサーバーモジュールのサービスプロセッサ上の Ethernet ポート。

NMI マスク不可能割り込み。

O

OBP OpenBoot PROM。

Oracle ILOM Oracle Integrated Lights Out Manager. Oracle ILOM ファームウェアは、各種 Oracle システムにインストール済みです。Oracle ILOM を使用すると、ホスト システムの状態に関係なく、Oracle サーバーをリモートから管理できます。

P

PCI EM PCIe ExpressModule。PCI Express の業界標準フォームファクタに基づくモジュラーコンポーネントで、ギガビット Ethernet やファイバチャネルのような I/O 機能を提供します。

POST Power-On Self-Test (電源投入時自己診断)。

PSH Predictive Self-Healing (予測的自己修復)。

R

REM RAID 拡張モジュール。HBA とも呼びます。[HBA](#) を参照してください。ディスクドライブ上の RAID ボリュームの作成をサポートします。

S

SAS Serial Attached SCSI。

SCC System Configuration Chip (システム構成チップ)。

SER MGT シリアル管理ポート。CMM およびサーバーモジュールのサービスプロセッサ上のシリアルポート。

server module
(サーバーモジュール) モジュラーシステムで主要な演算リソース (CPU とメモリー) を提供するモジュラーコンポーネント。サーバーモジュールには、オンボードストレージおよび REM と FEM を保持するコネクタがある場合もあります。

Service (サービス) PDF ブック『Netra SPARC T3-1B サーバーモジュールサービスマニュアル』に対応する HTML トピックセットの部分のタイトル。

SP サービスプロセッサ。

SSH Secure Shell。

storage module
(ストレージモジュール) サーバーモジュールに演算ストレージを提供するモジュラーコンポーネント。

U

UCP ユニバーサルコネクタポート。

UI User Interface (ユーザーインタフェース)。

UTC Coordinated Universal Time (協定世界時)。

UUID Universal Unique Identifier (汎用一意識別子)。

W

WWID World-Wide Identifier (ワールドワイド識別子)。SAS ターゲットを一意に特定する番号。

索引

C

CMM NET MGT ポート, 11
CMM SER MGT ポート, 11
取り付けのための使用, 21
CMM の IP アドレス, 18

D

DIMM の種類, 3

E

ESD
注意事項, 14
Ethernet ポート, 3

F

FEM, 3

I

ILOM
root パスワード、デフォルト, 18

K

KVMS, 3

L

LED
フロントパネル, 7

M

MAC アドレス, 16

O

Oracle Solaris OS の構成設定, 28
Oracle Solaris の構成設定, 28

OS

Oracle Solaris の構成設定, 28
ネットワークからのインストール, 27

P

PCIe EM, 3

R

REM, 3
RFID タグ, 16
root パスワード、デフォルト, 18

S

Solaris OS
Solaris の構成設定, 28
ssh コマンド, 20
start /SYS コマンド, 26
start コマンド, 20

U

UCP ポート, 23

W

Web インタフェース, 18

あ

アーキテクチャー、プロセッサ, 3

い

インストール
計画, 1
シャーシの準備, 15
必要な工具類, 14

お

奥行, 4

オプションコンポーネントの取り付け, 15

温度仕様, 5

か

環境仕様, 5

き

機能、サーバーモジュール, 3

く

グラフィックス、オンボード, 3

こ

高度仕様, 5

顧客情報シート, 2

コネクタカバー, 16

コンポーネントの取り付け, 15

さ

サーバーへの接続

CMM NET MGT ポート (CLI), 20

CMM NET MGT ポート (Web インタ
フェース), 18

CMM SER MGT ポート (CLI), 21

UCP ポート, 23

サーバーモジュール

OS の構成, 27

起動, 21

起動中の通信, 18

機能, 3

シャーシへの挿入, 16

取り付け, 13

ネットワークからの OS のインストール, 27

はじめての電源投入, 26

サーバーモジュールの起動, 21

サイト計画の仕様, 5

し

システムファームウェア, 3

湿度仕様, 5

シャーシ

サーバーモジュールの挿入, 16

出荷キットの内容一覧, 2

仕様

環境, 5

電気, 5

物理, 4

シリアルケーブルのピン配列, 21

シリアルポート接続, 11

シリアルリダイレクト, 18

診断メッセージ, 24

診断メッセージの監視, 24

重量, 4

シャーシ

準備, 15

す

寸法, 4

せ

設置の計画, 1

接続方法, 11

静電気防止用マットおよびリストストラップ
(取り付け), 14

そ

ソフトウェア、プリインストール, 6

た

高さ, 4

端末デバイス, 14

ち

注意事項

ESD, 14

処理, 13

つ

通信

起動中, 18

サーバーモジュールとの, 11

て

電圧, 5
データコネクタ, 7
電気仕様, 5
電源コネクタ, 7
電源ボタン, 7

と

取り扱い上の注意, 13
取り付け
 オプションのコンポーネント, 15
 サーバーモジュール, 13
取り付けに必要なツール, 14
取り付けのための CLI, 20
取り外しレバー, 16
ドングルケーブル, 8, 11, 23

は

配線, 8
背面パネルのコンポーネント, 7
はじめての電源投入, 26
 作業の概要, 25
幅, 4

ふ

フィルターパネル, 16
プリインストールされているソフトウェア, 6
フロントパネルのコンポーネント, 7
物理仕様, 4
プロセッサアーキテクチャー, 3

め

メッセージ、診断, 24
メモリー, 3

も

モジュラーシステムシャーシの準備, 15

ゆ

ユニバーサルコネクタポート (UCP), 3, 7

り

リセットボタン, 7
リモートコンソール, 18

れ

冷却, 3

